

# 校長通信

第7号 2017. 2. 3



【1】これからの入試問題は、こんな感じになる！

いきなりで申し訳ありませんが・・・  
左の写真の彼を知っていますか？

そうそう！有名なフランシスコ・ザビエルですね。何をした人か、知っていますか？

そうそう！日本にキリスト教を伝えた人ですね。そこで彼に因んだ問題でこのような問題がよく出題されます。

A-1

ザビエルがしたこととして正しい選択肢をすべて答えなさい。  
(このあと、選択肢が書かれている)

このような出題形式の問題が、今までの学力を問う問題です。すなわち、正しい知識をINPUTして、正しく処理できる能力＝情報処理能力です。このような出題形式が、少し難しくなるとこんな感じになります。

A-2

ザビエルがしたこととして正しい選択肢をすべて選び、年代の古い順に答えなさい  
(このあと、選択肢が書かれている)

これも、より正確に知識をINPUTして、正しく処理できたかを問う問題です。

ところが、ところがです。今後センター試験に変わる新しい試験では、こんな問題が出題されようとしています。

B-1

キリスト教を容認した大名を一人あげ、この大名が行ったこと、その目的を100字以内で説明しなさい。

**オッ！これは何だ？**

**キリスト教を容認した大名？誰それ？そんな人いたの？何をしたの？**

**日本ってキリスト教を弾圧してたじゃん。容認って何？**

**その目的って何よ？キリスト教を認めたんだから、キリスト教を広めようとしたんじゃないの？**

とってしまっは、間違いなのです。まだまだ勉強が足りません。もう一度日本史の教科書や資料を読んでもらうと、きちんと答えが載っています。

この問題は、ザビエルの日本でのキリスト教の布教に関する行動を、日本側から、それも支配者側から見た時にどのように捉えられたかという視点で出題される問題で、単にザビエルがいつ来たか、何をしたか、を知っているだけではだめなのです。

これは、ザビエルについてINPUTした知識を、複眼的に見る視点で自分の中で再構成する力を見ているのです。こうい

う力を「論理的思考力」と言います。さらに難しくなると、こんな問題になります。

B-2

キリスト教の日本伝来は、当時の日本にどのような影響を及ぼしたか、200字以内で説明しなさい。

このレベルになりますと、今文部科学省が提唱している「判断力・思考力・表現力」を試す問題と言えますね。これが、これから求められる力の「入り口」です。

しかしです！しかしなのです。Aレベルの問題でも、Bレベルの問題でも「正解」というものが、存在します。ところが、次の様な問題は、「正解」が存在しません。

C-1

もし、あなたがザビエルだとしたら、布教のために何をしますか。具体的な根拠とともに400字以内で説明しなさい。

このCレベルの問題を解答するには、どんな力が必要でしょうか？

- ①ザビエルが日本にきた戦国時代の具体的状況を把握していること。でないと「**具体的根拠**」を元には書けません。
- ②そして、布教活動を行うために、さまざまな方法を思いつくこと。
- ③最後に、自分としては「何を一番大切か」という価値判断をし、イメージすること

です。この作業を言い換えてみると

- ①は、勉強した知識をザビエルの立場になって活用する力
- ②は、さまざまな方法を考え、それぞれの良し悪しを判断するクリティカルシンキングをする力
- ③は、自分の価値基準を明らかにして、創造する力

です。この3つの力、

### ①知識の活用、②クリティカルシンキング、③創造力

というのが、21世紀を生きるために求められているのです。おそらく、このようなタイプの問題が、国公立大の2次試験、難関私立大学（関西で言えば、関関同立）の入試問題にどんどん出題されてくるようになると思います。

すでに、こんな問題が大学入試に出題されていることを知っていますか？

親友と最近連絡が取れません。どうやら、親友はひどく落ち込んでいるようです。何度か連絡を試みた結果、ようやく明日親友と会って話すことになりました。そこでは、どのようなやりとりが二人の間で繰り広げられるでしょう。二人のやりとりを対話形式で解答用紙のA欄に、そしてそのやりとりの中であなたが意図したことをB欄に述べなさい。

これは、2008年の慶応義塾大学医学部の小論文の問題です。この問題は、大学の入試問題ですが、かなり「生き方」に関わる深い問題ですね。友達が何を悩んでいるというように設定するか、そしてそれにどのように会話するか、その人の「生き方」のスタンスが問われます。

さて、ザビエルの問題ですが、これは私のオリジナルではありません。首都圏模試センターの「思考コード」からの引用です。首都圏模試センターとは、私立および中高一貫校の中学入試の対策を扱う教育産業です。関東の私立学校では、もう大学入試改革に向けて、「新しい学力」を育てるための教育に舵を切っているようですね。

知識を獲得するのは当たり前（今までの勉強スタイルです）、それをどのように活用するか、そして創造力を働かせて、「あなたなら、どうするか？」の答えを導き出す。そんな学びが求められています。

## 【2】実は、これが世界標準！

何か、大変なことがこれから始まるように思いましたか？

### 教科書の内容を覚え、問題集の問題を解いているだけじゃだめなの？ なんで、そんな難しい問題が出題されるの？

と思ったでしょうね。だけど、こんな知識詰め込み式で、INPUTしたものを吐き出すだけの試験や教育をやっているのは、いまや世界中で日本だけ！って言っても過言ではないのです。実はC問題レベルの勉強をやっているのが世界標準なのです。

少し、エピソードを紹介しましょう。まだ21世紀になる前の1990年代まで、大阪府にも東南アジアの国々から、教育関係者の多くが視察に訪れました。訪れた人たちは、「やはり、日本の教育は進んでいる、素晴らしい」と言って帰っていきました。ところが、21世紀に入って、もう東南アジアの国々から日本の教育視察に訪れるのは、「さっぱり」なのです。もう、日本の教育に学ぶ点などないのです。どんどん遅れているのです。特に英語教育、アクティブラーニング、ICT教育の分野で、遅れがひどい状態です。

さて、C問題レベルが世界標準である例を紹介しましょう。イギリスの中学生の教科書です。明石書店から出版されている世界の教科書シリーズ<sup>34</sup>『イギリスの歴史—帝国の衝撃 (THIS IS HISTORY The Impact of Empire)』です。

この教科書の中に、東インド会社を設立してイギリスがインドを植民地支配し、それに対してガンディーが独立運動をしたことについての記載があります。日本でも世界史で学ぶところです。この章を学ぶに当たっての目標のところに次のように書かれています。

#### 本章の課題

現在は1947年の2月であると仮定してください。あなたは、ガンディーの支持者としてマウントバッテン卿に一通の手紙を書かなくてはなりません。あなたは、イギリスがすぐにインドから立ち去らねばならないと確信しています。手紙の中で、あなたはインドの歴史についての知識を駆使して、「インドからの撤退」を決断するときがきたとマウントバッテン卿を説得してください。

ここに出てくるマウントバッテン卿とは、第二次世界大戦後にインドの総督に赴任したイギリスの貴族です。その彼に手紙を書いて、「もうイギリスがインドから立ち去ること」を決意させるのです。まさにCレベルの問題ですよ。これが中学生の教科書ですよ。こんな教育をイギリスの若者は、ずっと受けているのです。これでは、日本の若者は世界に通用しないですよ。

日本の若者は、『自分軸』というものが育っていないと言われています。つまり、

「あなたなら、どうするんだ？」

「あなたの意見は何なんだ？」

「君の意見を聞かせてくれ？」

「僕の意見について、何か反論があるかい？」

などと言われると、モゴモゴモゴモゴ・・・となってしまうのが、日本の若者です。ところが、欧米の教育（いまでは、世界の至る所で）では、小さいころから自分の意見を主張することを育てます。だから、自分の意見を述べることなんて当たり前前の事なのです。

今年、シカゴに行った生徒はわかりますよね。最後のフェアウェルパーティーで、「誰かスピーチしない？」とアムンゼン

の先生が問いかけると、出るわ、出るわ、どんどん高校生が出てくる。保護者が出てくる。お母さんがスピーチしている横で、小学生の子どもが「早く僕に代わってよ、僕が話したいんだ」と服を引っ張っているのです。これが、世界の姿なのです。C問題が世界標準の教育レベルなのです。

### 【3】最後に一日本はもう世界の中の「田舎のネズミ」

最後に必読の本を紹介しましょう。校長ブログにも書きましたが、読んでいる人は少ないと思いますので、再度紹介します。



道上氏の「日本エリートはズレている」という本です。彼が、韓国・中国、そして中東のUAE、ドバイに勤務しているときの経験、体験が、満載の本です。

なぜ読んでほしいかというと、

**世界の中での日本の真の姿がわかるから。**

これが1点目の理由。世界の国々は、必死に頑張っている。日本は、いつまでも「一番だ」なんて思っていると、とんでもないことになる、いやもうすでにになっていることをいろんな例を出して書いてくれています。

そして、

**日本の新聞に騙されない視点を持てるようになるから。**

これが2点目の理由。日本の新聞の記事を読んでいると、「中東は怖い」「スンニ派とシーア派という宗教対立があって、ずっと紛争している」というイメージをずっと伝えてきます。そして、中国は自国の利益しか考えないから、中東でもアフリカでも反発されているんだ、という論調で伝えてきますが、実は、そうではない！という事実が山ほどあるということがわかります。

最後に、

**中国、韓国、中東の高校生（特に中国）から見ると、「日本の高校生って、英語もろくに話せない、『田舎のネズミ』じゃん！」という本音が書かれているから。**

これが3点目の理由です。今年も〇〇高校に中国から高校生が来ましたよね。彼らの感想の中に、

「日本の高校生はいいね。放課後にクラブ活動があるし、書道や家庭科なんていうものもある。すごく楽しい。ぼくらは、7時間目・8時間目まで勉強で、自由な時間なんてないんだ。ほんと、うらやましいよ。」

という趣旨の感想がありました。おそらく、本音の部分もあると思いますが、この本を読むと、

「だけど、日本の高校生って、英数に弱くて、ろくに英語も話せない。僕らは一応英語で意思疎通できるだけの力もっているから。まあ、日本の高校生は学校生活を楽しんでいるようだけど、世界で活躍するのは僕たちさ！」

という本音が見えてくるのです。中国の高校生から、日本の高校生を見ると、どうも日本の高校生は「田舎のネズミ」の様です。

読んでいて、「目からうろこ」の連続の本です。保護者の方も、ぜひ読んでください。